九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

洛神賦

目加田，誠

https://doi.org/10.15017/2332986

出版情報：文學研究. 36, pp.71-99, 1948-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

洛神賦

目加田誠

魏の黄初三年（今より凡そ千七百年の昔）、曹植字子建は、當時の京師洛陽から、東國の己が封地への還るさ、伊闕の山を後にし、轘轅の坂を越え、通谷をすぎ、景山を登つた。時に日は西に傾き、車は危く、馬は疲れた。暫く馬を稅いて、芝田に秣ひ、楊林に徘徊し、洛水を顧望るとき、心は覺えず爽やかに、むすぼれた胸の憂も忽ちにして散ずるかに思はれた。その時ふとみると一人の麗はしい女性が洛水の巖の畔に佇み、その形の翩たること驚鴻の如く、婉たること游龍の若く、光彩の妙なること、薄雲の月を蔽ふか、流風の雪を舞はすか、肩は削り成せる若く、腰は素をつかねたるが如く、黑髮高く結び、長き眉微かに曲り、朱唇皓齒、眸すゞしく、靨あでやかに、物腰靜かに姿みやびて、うすものを身にまとひ、美玉を腰に佩び、金翠を釵し珠玉を綴つて軀を耀かし、霧綃の裾を輕く曳いて、幽蘭の芳馨しきあたりに微見えて山際を徘徊ひ、忽ちに又身を輕く遨び嬉しみ、旌旗に半ば隱れつゝ、皓き腕をかゝげて湍瀨に靈草を采る。曹植之を見て眷戀の情に堪えず、わが心を傳へさせる良媒もないまゝに、水波に托して辭を寄せ、玉佩を解いて之に贈つた。神女は禮儀もしとやかに、瓊玉をもて我にこたへ、深い淵のあたりを指して共に語らはむ意を示した。之ぞ昔語りの人を誑かす神女のたはむれかと疑はしく、尙も心を鎭め我を壓へてゐるうちに、神

女はあたりを彷徨ひつゝ、神光離合、或は暗く或は明かに、白鶴の今や飛ばうとして飛はざる如く、香草の徑を踐んで、思ひ深く聲を引いて吟つた。その時多くの神々もこゝに來り集ひ、清流に戯れ、神渚に翔り、明珠を採り、翠羽を拾ひ、湘水の神女、漢水の神女と相携へて、さながら共に佳偶の無き身を嘆くかに見えた。或は長袖を翳して佇み、身の輕きこと飛鳧の如く、或は水波を步んで、羅韈に塵を生ずるかと思はれる。その步みも危きが若く安きが若く、往くが如く還るが如く、振返る盼は澄み切つて、玉顏光り潤ひ、物言はむとして未だ唇を洩れず、その氣幽蘭の如く、まことに婀娜たる姿、思はず飲食をも忘れさせたのである。この時屏翳は風を收め、川后は波を靜め、馮夷は鼓を鳴らし、女媧は清らかに歌ひ、文鼈躍つて乘輿を警戒し、玉鸞を鳴らしてもろともに往く。六龍は嚴めしく首を並べて雲車を牽き、鯨鯢水禽翔つて之を衞る。北沚を越え、南岡を過ぎると見るや、またも立ちかへつて我を視て、怨めしくも君と我れ、人神の道を異にし、盛年空しく君に添ひ得ぬはかなきわがさだめと恨み、羅袂をあげて涕を掩ふた。再び相見ることも無いであらう互の身の、別れては各々鄕を異にし、遂にこの情を效すすべなきを哀しみつゝ江南の明璫をわれに贈り、身は太陰に潛むとも、長く心をきみに寄せむ、と言ひ終つて姿は消えて、光彩忽ちに隱れ去つたのである。曹植は是に於て山を上り川を下り、足は進めど心は留り、神女の姿を想ひ浮べて、顧みては愁を懷き、いま一度の出現を冀ふたが遂に空しく、輕舟に乘つて沂り、長川に浮んで歸るを忘れ、思は緜々としていや增し、夜もすがら寢もやらず、霜に霑うて曙に至つた。さて僕夫に命じて車よそほひ、わが東藩に歸らうと、騑轡を攬り策を抗げつゝ、尙も悵然として徘徊去るに忍びなかつたのである。

之が文選卷の十九、曹子建洛神賦の大要で、文選の中でも有名な賦であり、華麗にして幽玄、神韻盡きぬものとさ

れてゐる。之が人々に愛誦されるうちに、いつのまにか此賦について好奇の物語りが附け加はつた。

文選李善注に、記曰、として引いてあるのがその始めであらうか。曰く、初め魏の東阿王（曹植）は甄逸の女を求めたが、その望みを達せぬうちに、父曹操はこの女を五官中郎將曹丕、（植の兄、後の文帝）に與へた。植は心平かならず、晝夜想ひつゞけて寢食共に廢するに至つた。黄初年間曹植が入朝して見文帝に謁した時、文帝は甄后の玉鏤金帶（枕を彼に示した。植は之を見て覺えず泣いた。その時已に甄后は郭后のために讒言せられて死を賜つたあとなのである。曹植はこの枕を貰つて、封地にかへる途中、轘轅をわたり、洛水のほとりに休息して、又しても亡き甄后を想ひつゞけて居ると、忽ちにして彼女が現れ、もとより君に寄せし心を遂にとげ得ず、今この枕は君が手にあり、もつて枕席を薦めまゐらす。而も我身は郭后の姿に糠をもて口を塞がれ、髪もしどろに面を覆へば、この淺ましさ貌にて再び君王に覩ゆるは羞しと、云ひ訖つてそのまゝ姿は消えた。そして曹植の手にはたゞ一つの珠がをくられてゐたのであつた。植は悲喜自ら堪えず、遂に感甄の賦を作つた。後に明帝（文帝と甄后の子）が之を見て、改めて洛神賦と名づけたといふ。

この傳説の誣妄であることは、もはや多くの人のとなへて來た所である。しかし何しろ甚だ浪曼的であるので、人々の喜び傳へる所となつた。唐の李商隱の詩に

國事分明に灌均（後述）に屬す。西陲魂は斷つ夜來の人。君王天子と爲るを得ざりしは、半ば當時洛神を賦するが爲めなり。

同じ作者に、「宓妃枕を留む魏王の才」といふ句もあるから、李義山はこの傳説を喜んで、之に詩想を得たのであら

う。大體甄后といふ女は、袁紹が次男の熙の妻として娶つた女を、鄴が陷つた時、魏の曹丕がその美貌の比ひ稀れなるを喫じ、父曹操がその意を汲んで迎へて娶らせたのである。世說新語にはそれについて面白く語られ、又之について曹操と孔融との皮肉な問答をもあげてゐる。

兎に角相當問題の女性であつた。だが曹丕に納れられて、やがて甄后となつて、美德のかづ〳〵も傳へられ、その間に明帝を生んだ。後に郭后が寵せられるに至つて、失意の境遇に陷り、君を怨んだといふかどで文帝に憎まれ、黃初二年六月死を賜つた。三國志注に引く魏略、漢晉春秋によれば、甄后の誅は全く郭后の讒言によるもので、死後葬るにも、髮は面を覆ふたまゝ、糠をもつて口を塞いで埋めたさうで、李善注の以糠塞口、今被髮云々といふのは即ちこのこと。洛神賦が黃初三年の作だとすれば、この事件は恰度その前年に當る筈であらう。

文帝曹丕と弟曹植とかくこの曹植は昔から兄に虐げられる弟の代表者となつてゐる。乃で弟の植の方には、後世の同情が翕然としてあつまつた。だが有名な七步の詩も、その傳へられる形に二通りあり、いづれは後人の傳會であらうかと考へられ、兄の文帝もそれほど單純な男ではない。

文帝曹丕と弟植とは、五つ違ひの同腹の兄弟であつた。父の曹操は所謂亂世の姦雄、多才多藝で、書は武を講じ、夜は經傳を論じ、まことに非常の人、超世の傑物であつた。その詩も鍾嶸の所謂古直にして悲涼の氣あるもの、短歌行、苦寒行の樂府は人口に膾炙する。彼自身が詩書を好んで軍旅に在つても手に書卷を放さぬ程であつたと同時に、多くの文士を招いて手許に置いた。所謂建安の七子といふ中には孔融のやうに、始終曹操にさからつて、流石の曹操も手を燒いて、とう〳〵わけの分らぬ罪を被せて殺しで了つたのもあるが、それもそこに至る迄には曹操も、出來る

丈け情を矯め我慢をつゞけてゐたので、この點同じく曹操が手を焼いて、最後には彼の手許から放して、他人の手に渡して殺させた禰衡の場合と共に、曹操は名士を納れるといふ評判を傷けまいと、隨分辱を忍んで剛腹を裝つてゐたのだつた。大體曹操は後漢の大學者蔡邕と仲が好かつたので、その關係から後に蔡邕の門下が彼の許に多く招かれて、師の文學を傳へたのではないかと思ふ。たとへば建安七子の一人の阮瑀も蔡邕の弟子であつたし、又曹操が孔融を殺すために、孔融の彈該文を書かせて、その文章の恐ろしさに一世を震ひ恐れさせたといふ路粹、（後に彼も亦曹操によつて殺されたが）などもやはり蔡邕の門下であつた。之らの人々が共に曹操の軍謀祭酒となつてゐる。又蔡邕の娘の文姬が、漢末の動亂に、匈奴に流落してゐたのを、再び贖ひ戻したのも曹操で、蔡文姬が已れの悲劇を詠つた悲憤の詩は文學史上の精彩であると共に、自分の誦んじてゐた四百餘篇の文章を曹操の爲めに寫して献つたといふことも注意すべきである。もとより曹操は文士達を招いて徒にその詩文を觀賞したのではない。凡そ中國といふ國は美文名文といふものが特に喜ばれて、典禮のみならず、檄文だとか布告だとかにも名文の効果が非常に重んぜられる國柄であるから、阮瑀にしても、陳琳、徐幹、王粲にしても、皆曹操が軍謀祭酒として手許に置き、劉楨、應瑒（以上六人に孔融を加へて建安七子といふ）らと共に文書を書かせたのであらう。ことに阮瑀陳琳の二人は檄文や手紙を書くのに秀でてゐた。所が此等の人が曹操の子、丕や植に與へた影響は少くないので、曹丕の典論や、吳質に與へた手紙を見ると、彼ら兄弟が彼等文士の文章をどんなに愛好し翫味したかゞわかる。之らの文士も亦わが文學の眞價を認めてくれる公子として喜び重んじたことだらう。曹操も亦その子に學問を奬勵したから、彼ら兄弟は早くから文藝の才をあらはしてゐる。殊に弟は植は十才の時に詩賦數十萬言を誦讀したといはれ、建安十五年鄴に銅雀臺が出來て、

諸公子が皆臺に登つて賦した中にも、植は筆をとつて立どころに成り、その文才に父を驚かせた。十六年、曹操が西のかた馬超を征するとき、兄は國に留守し、弟は軍に從ひ、兄は弟のために感離の賦を作つた。さうした兄弟であつたが、結局は夫々相容れぬ性格の持主で、かくも美しく示された兄弟愛も、いつか次第に暗雲に蔽はれて行つたのであつた。

建安十六年、兄は五官中郎將となり、弟は平原侯に封ぜられた。十八年曹操は漢の天子から魏公に策命され、九錫を加へられて、天子の禮制になぞらへた。十九年曹植は臨淄侯に徙る。この年曹操は孫權を征し、鄴には植を留守させた。この頃植の英才は益々あらはれ、丁儀丁廙等が之を補佐して居り、曹操もほとんど彼を太子に立てようと考へたが、尙決定はしかねてゐた。こうなつてくるとたとへ彼ら兄弟は美しい感情をもち合つてゐたとしても、そのまゝにして置かぬのは周圍の人であらう。曹植はもとより性簡易、威儀を治めずといはれ、我儘な、物にかまはぬ質で、とかく一癖あるものが左右に集つた。丁儀はかつて曹操が自分の息女をめあはせようとしたが、この男が合憎眇であつたが故に五官中郎將(丕)の反對にあつてこの話は成り立たなかつた。後に曹操は丁儀と語り合つてみて、その人物を今更惜しみ、眇でもよかつたものをと後悔したが、丁儀も亦之をよく〳〵殘念に思ひ、邪魔立てした曹丕を一生恨んだといはれてゐる。この丁儀が弟の丁廙と共に曹植の羽翼となつた。先にあげた禰衡は、あの孔融と仲がよかつたと共に、曹操の主簿の楊修とも親しかつたが、この楊修といふ男は袁術の甥であり、つまり孔融禰衡一派の人間で、之が曹植の最も腹心であつた。之に反して、細心の兄の方には、策謀家の吳質とか、詩賦に巧みな應瑒、繁欽とか、博雅の聲高い王朗とかいふ人々が之を輔けたのである。

建安二十年、曹植は張魯征討軍に從軍したが、その折丁儀王粲に贈つた詩が「軍に從つて函谷を度り、馬を驅つて西京を過ぐ」、云々といふ佳作で、丁儀、王粲らが立派な才能を抱き乍ら卑い地位にをかれてゐるのを氣の毒に思ふといふ意味を詠つてゐる。建安二十一年曹植二十五才、父曹操は爵を進めて魏王となる。曹植が楊修に與へた手紙は或はこの頃のものであらうか。その中に、「僕少小より好んで文章をつくり、今に至るまで二十五年」とあり、その楊修はこの後三年して曹操の爲めに誅されるのである。この手紙は曹植が自分の文章の添削を依頼し、旁々當時の作家を批評し、且つ文學に對する自分の考をのべたもので、その末にかう曰つてゐる。

「辭賦は畢竟小道に過ぎぬ。之によつて大義をかゝげ、明かに後世に示すに足るものではない。昔楊雄は、漢朝の侍衛の小臣に過ぎなかつたが、その彼ですら、雕蟲篆刻壯夫は爲さゞる也と云つたではないか。我今德薄しとはいへ、身は藩侯の位にある。願くは中央に力をあはせ、惠を人民に垂れ、永世の業を建てゝ、功を金石に傳へたい。虛しく文筆辭賦をもて名譽とはしたくないのだ。」

之を兄の文帝が吳質に與へた手紙に「蓋し文章は經國の大業、不朽の盛事である。人の齡はいつかは盡き、榮華歡樂もその一代に過ぎぬ。いづれは限りの日が來るのだ。それから見ると、文章の永遠なるにははるかに及ばぬ」と云つたのと比べて興味が深い。曹植のこの手紙に對して、楊修はかう答へた。

「今我君の作り給ふ賦頌は、古の詩の道を傳へるもの、孔夫子の刪定を俟つまでもなく、已にかの詩三百篇に異らず。いかにもわが祖楊雄は、年老いて心くらみ、法言などゝ申す書を著し、己が若かりし日の詩賦を悔いて、彫蟲篆刻は童子のわざ、大丈夫の爲さゞるところなどゝ申したるも、かくいへば古仲山甫が周頌を作り、周公が鴟鴞の

詩を作りしことも亦誤とや申すべき。今かしこくも君わが先祖の過言を引いてかくのたまふは、恐らくは深き御思考の上とも覺えず、そも〳〵經國の大業を忘れず、千載の名を傳へ、その勳功を大鐘に銘し、そのほまれを竹帛にしるすが如きは、もとより我君の天資自ら然らしむる所、いかで文章の道と兩立せぬことあるべきや。」

と云つてゐる。この主從の手紙に於ても曹植の手紙の末に、「餘は明朝面會の際に讓る」といひ、楊の手紙の首には「侍せざること數日、早くも數年を經たるが如し」といふ。以て兩者の親しさを察すべきであらう。

楊修、丁儀兄弟、之らの人々を羽翼として、曹植はその行動性に任せ、我と身を飾る心掛けもなく、或は酒を飲んで節度なく、或は車を馳道に馳せて、ほしいまゝに司馬門を開いて出て行くなど、いろ〳〵と驕兒の振舞目に餘り、流石の曹操も首をかしげるに至つて、寵愛は次第に衰へた。もとより一方兄の丕及その一黨が、その間に在つてさま〳〵の術を用ひた所もあつたらしく、曹丕は情を矯めてつとめて自ら飾り、宮人左右も亦之が爲めに曹操にとりなしたので、遂に曹操も初意を翻して兄曹丕を太子と定めた。ついで曹操は楊修が曹植の側にあつて、才策がありすぎ、且つは袁術の甥でもある所から、今後何をたくらむか知れぬその恐る可き謀叛氣を警戒して、彼に罪を被せて誅殺して了つた。曹植の身邊には次第に暗い影がさして來るのである。その年建安二十四年、曹仁が關羽の軍に圍まれたので、曹操は植を南中郎將行征虜將軍として曹仁救援に赴かせやうとしたが、時も時、植は酒に醉つて父の命を受けず、曹操の怒と悔は極度に達した。魏氏春秋によれば、眞か否か、之は兄太子丕が弟に迫つて無理に酒に醉はせたのだと云つてゐる。

翌年曹操が死に、太子曹丕が位を嗣ぎ、ついで漢帝にせまつて禪を受け、帝位についた。魏の文帝がこれである。

詩を作りしことも亦誤とや申すべき。今かしこくも君わが先祖の過言を引いてかくのたまふは、恐らくは深き御思考の上とも覺えず、そも〳〵經國の大業を忘れず、千載の名を傳へ、その勳功を大鐘に銘し、そのほまれを竹帛にしるすが如きは、もとより我君の天資自ら然らしむる所、いかで文章の道と兩立せぬことあるべきや。」

と云つてゐる。この主從の手紙に於ても曹植の手紙の末に、「餘は明朝面會の際に讓る」といひ、楊の手紙の首には「侍せざること數日、早くも數年を經たるが如し」といふ。以て兩者の親しさを察すべきであらう。

楊修、丁儀兄弟、之らの人々を羽翼として、曹植はその行動性に任せ、我と身を飾る心掛けもなく、或は酒を飲んで節度なく、或は車を馳道に馳せて、「ほしいまゝに司馬門を開いて出て行くなど、いろ〳〵と驕兒の振舞目に餘り、流石の曹操も首をかしげるに至つて、寵愛は次第に衰へた。もとより一方兄の丕及その一黨が、その間に在つてさま〳〵の術を用ひた所もあつたらしく、曹丕は情を矯めてつとめて自ら飾り、宮人左右も亦之が爲めに曹操にとりなしたので、遂に曹操も初意を翻して兄曹丕を太子と定めた。ついで曹操は楊修が曹植の側にあつて、才策がありすぎ、且つは袁術の甥でもある所から、今後何をたくらむか知れぬその恐る可き謀叛氣を警戒して、彼に罪を被せて誅殺して了つた。曹植の身邊には次第に暗い影がさして來るのである。その年建安二十四年、曹仁が關羽の軍に圍まれたので、曹操は植を南中郎將行征虜將軍として曹仁救援に赴かせやうとしたが、時も時、植は酒に醉つて父の命を受けず、曹操の怒と悔は極度に達した。魏氏春秋によれば、眞か否か、之は兄太子丕が弟に迫つて無理に酒に醉はせたのだと云つてゐる。

翌年曹操が死に、太子曹丕が位を嗣ぎ、ついで漢帝にせまつて禪を受け、帝位についた。魏の文帝がこれである。

曹植はその時漢朝の爲めに喪を發して悲哭した。父曹操在りし日は、たとへ九錫を加へられ、魏王に封ぜられ、事實天下の權を握つても、流石に帝位を簒ふことは憚つてゐた。こゝに至つて曹丕は、表面如何に禪讓の形を飾つても、漢を簒つた事實は蔽ふべくもない。この時今一人、おほつぴらに哭したものがあつた。蘇則といふ男、亡んだ漢の爲めに哭したのである。後或時のこと、文帝が左右に向つて、「人の心はさまざまである。自分は天命に應じて漢帝の禪を受けたのに、世間には之を哭したものがある由」と云つた。その場に居合せた蘇則は一途にわがことと思ひ込み、今や正論を以て對へ出さうとして、人の目くばせで危く止つたことが魏志に出てゐる。文帝の怨憎は他にあつたのである。彼の弟を見る目が益々險しくなつて行つたのも止むを得まい。

文帝今は憚るところなく、即位の年に丁儀丁廙を誅して弟の羽翼をもぎとり、他の諸侯と共に弟をもその遠い封地に逐ひやつた。文帝の諸侯王に對して採つた政策は極めてきびしいものであつた。監國謁者の灌均といふものが、帝に向つて、曹植が酒に酸ふて悖慢で、使者を脅したと奏上した。魏志には「黃初二年監國謁者灌均希指奏云々」と書かれてゐる。希指とは人の意を迎へる事で、曹植を忌む文帝の意に媚びて讒言したものに違ひない。朝廷に於ても同じ心の諸臣たちが、植に對する斷罪を奏請したが、文帝は之を抑へて「植はわが母を同うする兄弟である。天下に於て、何ものも容れぬところのない自分であれば、ましてわが弟をや。骨肉の親ではないか。自分はその罪をすてゝ、彼に誅罰は加へまい。」と、改めて植を安鄉侯に封じ、つゞいて更に鄄城侯に改めた。魏志には之を黃初二年としてゐるが、全三國文に引く上九尾狐表には、黃初元年十一月二十三日、鄄城縣北に於て衆狐を見る、とあり、又曹植の先王を祭らむことを請ふ表は、曹操の崩後半年ならぬ時に書かれたもので、その中に北河のほとりで先王を祭りたい

と願つてゐるが、北河のほとりとは責躬詩序の改封衮邑于河之濱なるもので、山東濮縣の東、河に近い鄄城を云つてゐるやうだから、彼が鄄城に封ぜられたのは、やはり通鑑のやうに、黄初元年のことゝ見てをく方がいゝのかも知れない。植が自ら亡き父を祭らうとする願ひは、禮制の上からして群臣に反對ありとの理由で、帝の認めるところとはならなかつた。

雜詩六首は、李善注に、鄄城に在つて鄉を思うて作るといふ。當時の曹植の心境を示す意味深い作である。

一、高臺悲風多く
　朝日北林を照す
　之子萬里に在り
　江湖迥に且つ深し
　舟を方ぶるも安にか極るべき
　離思故に任へ難し
　孤雁飛んで南に遊び
　庭を過ぎて長く哀吟す
　翹思遠人を慕ひ
　願くは遺音を託せむと欲すれども

形景は忽ちにして見えず
翩々として我心を傷ましむ

二、轉蓬　本根を離れ
飄颻　長風に隨ふ
いかで意はむ廻飆　擧がりて
我を吹いて雲中に入れんとは
高々と上りて極みなし
天路　安んぞ窮むべけんや
類たりこの遊客子
身を捐てゝ遠く戎に從ひ
毛褐は形を掩はず
薇藿は常に充たざるに
去き去いて復た道ふこと莫からむ
沈憂人をして老いしむ

三、西北に織婦あり
綺縞　何ぞ繽紛たる
明晨　機杼を乗り
日昃くも文を成さず
太息して長き夜を終へ
悲嘯青雲に入る
妾が身は空閨を守り
良人は行いて軍に從ふ
自ら三年にして歸らんと期せしに
今は已に九春を歴たり
飛鳥樹を繞つて翔り
嗷々と鳴いて群をもとむ
願くは南流の景となり
光を馳せて我が君を見む

四、南國に佳人あり

容華　桃李の如し
朝に北海の岸に遊び
夕に瀟湘の沚に宿る
時俗　朱顔を薄んずるに
誰が爲めにか皓齒を發かん
俛仰して歲まさに暮れむとす
榮耀久しく恃み難し

五、僕夫早く駕を嚴へよ
吾將に遠く遊ばんとす
遠く遊んで何にか之かんとする
吳國こそ我が仇なれ
將に萬里の塗に騁せんとす
東路安んぞ由るに足らん
江介　悲風多く
淮泗急流馳す

願くは一たび輕く濟らむと欲すれど
惜しい世方舟なし
閑居は吾が志に非ず
甘心じて國憂に赴かむを

六、飛觀百餘尺
牖に臨んで欄軒に御る
遠望千里に周く
朝夕平原を見る
烈士悲心多く
小人は自閑を娛む
國讎亮に塞がらず
甘心して元を喪はんことを思ふ
劒を拊でゝ西南を望み
泰山に赴かんと思欲す
絃急にして悲聲發す

このやうな思でゐた曹植には更にどのやうな運命が待つてゐたか。曹植の自誡令に（藝文類聚作黄初六年令）いふ、「自分は昔、人を信じ易い心から、己れの周圍に少しも心を拂はなかつた。ところが東郡の太守王機、防輔吏倉輯等の讒言によつて深く朝廷に罪を獲た。身は鴻毛より輕く謗は泰山より重い。幸に天子の御情けによつて、朝廷の役人共の議決を斥け、この限りない罪を赦されて、再び我が舊居にかへり、もとの封地に戻ることが出來た。まことに天子雲雨の施こそ邊際もないものである。歸國の後は、門を閉ぢて孤獨を守り、かくて居ること二年。王機らはしきりに毛を吹いて瑕を求め、千端萬緒、自分を陷れようと計つたが遂に言ふ可き隙を見出さなかつた。雍丘に封ぜられるに到つて又々監官に訴へられて紛繞を生じたが、その後三年、遂に彼らは自分をどうすることも出來ないのは、凡そ人の信心なるものは、神明に通ずるが故であらうか」。又責躬詩李注に、曹植の出獵表を引いて、「臣自ら罪を招き、京師に徙つて罪を南宮に待つ」。又植の集を引いて、「植罪を抱いて京師に徙居し、後本國に歸る」などゝあり。之を以て見ると、彼は黄初元年鄄城に封ぜられ、つゞいて王機らの讒誣にあふて京師に遷され、南宮に拘はれて罪を待つ身となつた。この時朝廷の怒深く、母太后に逢ふことも叶はず、兄文帝に謁することも許されず、「仰いで城闕を瞻、俯して闕庭を惟ひ、長懷永く慕ひ、憂心醒ふが如き」思をのべたのがかの應詔の詩である。やうやく朝覲を許され、翌黄初三年四月特に鄄城王となつて再び鄄城に歸つたものと思はれる。この京師よりの歸るさこそ、洛川を濟つて、こゝに洛神の賦が出來たものと考へられる。

黄初四年五月曹植は雍丘王に徙されて京師に上つた。この時白馬王彪、任城王彰も夫々京師に集つた。ところで任城王は俄かにその邸に薨じた。之についてはその蔭に暗い秘密が傳へられた。世説にしるすところによれば、任城王は生來武勇すぐれた男であつたが、文帝はこの弟の驍勇を忌み、棗を食ふにことよせて之を毒殺した。母太后は泣いて文帝に、已に任城を殺した上は、重ねて東阿（植）を殺すでない、と頼んだといはれる。之も小説家の言にすぎぬかも知れぬ。しかし當時魏朝の、諸王に對する法は實は峻厳を極めてゐたので、この點決して曹植一人が受難者ではない。皆魏朝中央集權主義の犠牲であつた。任城王崩じて、曹植は白馬王と途中まで連れ立つて、夫々藩國に歸らうとしたが、それも朝廷の許すところとならなかつた。此時の悲憤の情を詠じたのが彼の代表作白馬王彪に贈るといふ七首の連作である。

一、帝に承明廬に謁し
　逝いて將に舊疆に歸らんとす
　清晨皇邑を發でゝ
　日夕首陽を過ぐ
　伊洛廣く且つ深く
　濟らんとすれど川に梁なし
　舟を汎べて洪濤を越え

彼の東路の長きを怨む
頤瞻て城闕を戀ひ
領を引して情内に傷む

三、太谷何ぞ寥廓
山樹鬱として蒼々
霖雨我が塗を泥し
流潦浩として縱横す
中逵に絶えて軌なく
轍を改めて高岡に登る
修坂雲日に造り
我馬玄黄

三、玄黄猶ほ能く進めども
我が思は鬱れ紆ひぬ
鬱れ紆ふて進み難し

親愛離居に在り
本相與に偕にせんと圖りしに
中にして更て俱にする能はず
鵶鶏衡枒に鳴き
豺狼路衢に當る
蒼蠅白黒を間へ
讒巧親を疎んぜしむ
還らんと欲すれども絶えて蹊なく
轡を攬りて止つて躊躇す

四、
躊躇ど亦何にか留らむ
相思ふて終極なし
秋風微凉を發し
寒蟬我が側らに鳴く
原野何ぞ蕭條たる
白日忽として西に慝る

歸鳥は　喬林に赴き
翩々として羽翼を厲ぐ
孤獸は走つて群を牽め
草を銜んで食ふに遑あらず
物に感じて我が懷を傷ましめ
心を撫でゝ長太息す

五、太息すれどはた何とか爲む
天命我と違ひぬ
奈何せむ同生を念へども
一たび往いて形歸らず
孤魂故域に翔り
靈柩は京師に寄る
存ふる者も忽ちに復た過ぎ
亡沒して身自ら哀しまむ
人生れて一世に處る

去ること朝露の晞くが若し
年桑榆の間に在り
影響追ふ能はず
自ら顧みるに金石にあらず
咄嗟て心を悲しましむ

六、心悲しんで我が神を動かす
棄置復た陳ぶること莫からむ
丈夫四海に志す
萬里猶ほ比隣のごとし
恩愛苟も虧けずんば
遠くに在りても分日に親しからむ
何ぞ必しも衾幬を同にして
然る後殷勤を展べんや
憂思疾病を成すは
乃ち兒女の仁ならむも

倉猝　骨肉の情
能ぞ苦辛を懷かざらむや

七、苦辛何をか慮思る
天命信に疑ふ可し
虚無列仙を求むるも
松子久しく吾を欺く
變故須臾に在り
百年誰か能く持へむ
離別ては永く會ふこと無けむ
手を執るはは た何れの時ぞ
王それ玉體を愛せよ
俱に黄髮の期を享けむ
涙を收めて長路に即き
手を援つて此より辞る

前章の末句を次章の首に疊んでゆくこの詩の手法は詩大雅文王の篇に得たものか、あきらめ切れぬ悲憤の情を執拗に訴へる特異の効果をあげてゐる。この詩を贈られた白馬王も、ずつと後になつて時の朝廷から自殺せしめられた悲運の人であつた。

文帝の執つたきびしい法治主義はもとより父曹操にうけついだものであつた。彼の政治上の業績の中、宦官の官を諸署令以下に限り、群臣の太后に事を奏するを禁じ、后族の家は政に容喙するを許さぬといふ二つの政策は後世から賞讃されてゐる。天子に絶對の權力を集中しようとした結果は、諸國に封じた兄弟に對する冷酷な壓迫監視となり、彼らの兵力を弱めてをくためには、僅か百數十人の、而も年六七十の老兵ばかりを與へたものである。（曹植諫取諸國士息表）

この文帝の政策は、次の明帝にも受けつがれ、諸王の入朝も許さず、諸王互ひの交際をもとゞめた。曹植が求通親々表（明帝太和五年）に曰く

「近ごろ婚姻通ぜず、兄弟永く絶え、吉凶にも相問はず、慶弔の禮もすたれ、恩義の違へること路傍の人よりも甚しく、互に隔つること胡越よりも更なり。今や法制によつて永く朝覲の望みなし。陛下に注ぐ臣が心情は神明の知るところ、之亦天のなせるわざか。今更に何とせむ。諸王皆兄弟相親しむ情切なるものあり。願くは陛下、和樂の篤義を全うせしめたまへば、之古人の嘆美せし道を當世に行ひたまふものなり。」

中央の壓迫は決して曹植一人を目指したものではなかつた。しかしそれを殊更にひし〳〵と感ぜずにゐられないのが曹子建であつた。

文帝曹丕は少年の時から騎馬をよくし、射に巧みに、ことに擊劍が得意だつたといふことは流石亂世に育つた男であるが、同時に彈碁をはじめさま〳〵の伎能戯弄を心得てゐた。その文才は父曹操の豪放さ、弟曹植の氣骨はなくとも、やはり當時のすぐれた作者には違ひなく、凡そ婉約をきわめたものであつた。燕歌行、雜詩漫々秋夜長の篇、西北有浮雲の篇などまことに佳篇と稱するに足る。彼の性格にはやゝ輕々しい所があつたといひ、文章にも戯れめいたものがあり、臣下との應答にも些か帝王の尊嚴と敬愼とを傷けるやうなものもあつたが、それだけに柔かさと輕妙さとを持つてゐる。彼の猜疑心、これは親讓りと云はれるが、その術策の陰險さも、彼の一面女性的な性格の然らしめた所であらうか。

曹植は之に反して氣骨あり、物に構はず、人を信じて疑ふを知らず、ことにその母に對する愛慕、兄に對する親愛の情はまことに深いものがあつた。弟の才は兄にまさり、父にも始めは之こそ我が世を繼ぐものと思はれ乍ら、持つて生れたその性格から、周圍のものに誤まられ、いつか驕兒となつてその身を誤つた一方、兄は自ら修師して、よく官人左右の心を得、遂に九五の位に即いた、曹植は文帝に對して弟とはいへ已に臣下の分際である。人を信じ得ぬ兄の目から見れば、恐らく何をたくらむか計られぬ危險な弟とも見えたであらう。而も兄は常に弟に對して赦命を下し、弟はたえずその恩德を謝し、すべて已れの不德と自ら責めねばならぬ立場だつた。兄には常に一點の非もなく、弟は常に失策あり、常に隙だらけであつた。

黄初六年文帝は曹植のゐる雍丘に行幸して、特に五百戸を增して恩德を示した。その翌七年文帝は四十才を以て崩じ、あとに文帝と甄后との間に生れた太子叡（明帝）が位に即いた。翌太和元年、曹植は浚儀に徙り、二年又雍丘に

還つた。夏四月明帝が長安から洛陽に還つた時、世上の噂さに帝の崩御を傳へ、之に惑はされた人々は植を迎へて立てようとした。曹植の存在は當時に於てそのやうに重く、それと共に彼の立場がいよ〳〵危いものになつたことは察せられる。

曹植も已に三十七才といへば齡不惑に近く、兄文帝が死んでみれば親愛と反撥とを常に心に交雜させた相手もなく、東藩に在つて逸豫の生活を餘儀なくされつゝ、どうにもそれに堪え切れぬものがあつた。目を擧げて見るなら、黄初四年、蜀漢の劉備崩じ、後主を奉じて孤忠を盡す諸葛孔明は、出師の表を上つて魏を伐ち、魏軍は之にしば〳〵惱まされつゝあり、南の方、吳に於ては孫權が魏の太和三年帝を稱し、天下の形勢は一日も安逸を許さぬ。生きて益なく死して損なく、徒に位を東藩に竊み、晏如として生活してゐるには堪へぬ思の彼だつた。乃で彼の「自試を求むる表」となつて、君國の爲めに身を投ずる機會を我にも與へよと迫つたのである。このまゝにかたりつぐ可き名も立てずに、虛しく祿を食んで白首に至るなら、それは牢の中に飼はるゝ禽獸に異らぬ。我に一部隊の兵を與へ、西、大將軍曹眞、或は東大司馬曹休の部下となつても働くを許さば、よしや孫權を禽にし、孔明を馘る能はずとも、願くはその首長を虜にしその醜類を殲さう。思へば先帝（文）も早く崩じ、威王（任城王）も亦薨じ、この二人の兄は共に早く世を去つた。我亦ひとりいかで長からむ。冀くは塵露の微を以て山海を補益し、螢燭の末光もて日月の光を增さむ、と、古をのべ今を論じ、心中の鬱結を吐露して上表したのであるが、しかもその請はもとより容れられず、曹植はこゝに於て悵然絶望するほかはなかつた。太和三年植は雍丘から又もや東阿に遷されてゐる。植の遷都の序にいふ、

「余初め平原に封ぜられ、轉じて臨淄に出で、中ごろ鄄城に命ぜられ、遂に雍丘に徙り、邑を浚儀に改め、末に將に東阿に適かむとす。號は六たび易はり、厄は實に三遷、連に疾土に遇し、衣食繼がず。」

之亦魏朝が諸王の勢力を殺がうとした政策の犠牲であつた。翌四年母太后が崩じた。彼の生は今や全く風に轉ずる蓬にひとしいものであつた。太和六年陳王に封ぜられたが、藩國に對する中央の壓迫はいよ〳〵峻迫に、曹植は常に汲々として樂しまず、憂悶病をなして薨じたのである。時に四十一。魏の一族は皆早死にであつた。謚して思といふ。之が陳思王曹植字子建の生涯であつた。

今曹植一代の代表作、初にかゝげた洛神の賦について、その構想に先行するものを考へるなら、先づその序に、「黄初三年、余京師に朝し、還りて洛川を濟る。古人言へるあり、この水の神、名づけて宓妃といふと。宋玉が楚王に對へて、神女の事を說けるに感じ、遂にこの賦を作る」といつてゐるので、先づその宓妃の傳說、及び宋玉の賦について見ねばならぬ。宋玉の賦はそも〳〵屈原の楚辭から出たものである。離騷にいふ「吾豐隆をして雲に乘り、虙(宓)妃の所在を求めしむ」云々。虙妃とは伏犠の女、洛水に溺れて洛神となつたと傳へられる。同じく楚辭の九歌の湘君湘夫人は堯の二女が舜の妻となり、沅湘の水に死んで神となつたものと漢代の人は注してゐる。

「帝子北渚に降る。目眇々として予を愁へしむ。嫋々たる秋風、洞庭波たちて木葉下る」

と詠はれる水の神である。又「河伯」の篇には日暮悵として歸るを忘れ、極浦に懷ひにふける折柄、河の神が龍にの

り、文魚を從へて來る描寫があり、之らが洛神賦の來源となつてゐることは云ふ迄もない。この賦の中で「南湘の二妃に從ひ」とあるのは、この湘君湘夫人をさす。沅湘の神、洛水の宓妃ばかりでなく、同じく賦の中に「漢濱の游女」とか、「交甫の棄言に感じ」云々といふのは、列仙傳に、鄭交甫といふものが江漢の湄で二人の神女に逢ひ、之に挑むと、女は佩を解いて之に與へた。が交甫が數歩を行く間に、懷の佩も、女の姿も共に消え失せて了つたと語られてゐる。そしてこの話が詩經の漢廣の詩「南有喬木、不可休息、漢有游女、不可求思」の解釋と結びつく。韓詩外傳に於て漢廣の詩は、孔子と子貢が阿谷の處女に出逢ふ話に引かれてゐるが、いつか之が江漢の神女を歌ふものとして扱はれて來たものらしく、漢の游女とは漢水の女神とする說が易林、文選稽康琴賦汪引薛君韓詩章句にも之が見えてゐるし、そのほか楊雄、張衡らも之を用ひてゐるから、漢代三家詩の方でさういふ解釋が行はれたものゝやうだ。曹植の洛神賦はまさにこれらの說を受けてゐるのである。

かやうにして水神の物語りは古くから中國に擴がつてゐたのである。蒼茫とたそがるゝ大川のほとりに立つて、憂深き心に身世の孤獨をひしと感ずるとき、淼々たる水の面に、神女の姿を幻想することは決してありえぬことではあるまい。

宋玉の神女賦はいかにも洛神賦に先立つもので、曹植も往々その美しい辭句を己れの賦中に採り入れたあとがあるが、而も大切なのはその兩賦の間の大きな相違である。

宋玉には神女賦と共に高唐の賦、好色賦がある。高唐賦は楚王の爲めに巫山の神女を描き、好色賦は徒らに宋玉の人品の低さを露はす。神女賦は高唐賦につゞき、宋玉が夢に神女と遇ひ、王の爲めに神女の姿を物語るといふ形をと

る。まことに狎るゝが如く、怒るが如き神女の態を描いて遺憾ないものだが、結局それは王に媚びて王の意を悅ばすために美辭麗句を並べたに過ぎぬ。洛神賦の、我も神女も、共に運命の寂しさをどうにも出來ぬ切ない心持などはもとより彼に求む可くもない。

王粲にも亦神女の賦があつた。しかしそれは神女の佳遇なきを以て、わが世に知遇なき嘆きを托したものであつて、情緒は自ら洛神と異る。同じく神女を賦しても作者それ〴〵の立場と心持で、皆異つたものを生じてゐるのである。

かくして曹植の洛神賦といふものは、漢以來の賦の樣式に從ひ、宋玉の賦に倣ひ、古傳說に感興を得て作られたもので、形式構想共に目新らしいものではない。而も一讀淒涼の氣の漂ふのは、勢ひ曹植自身の氣骨、そして身に泌む寂寥の心を以て貫ぬかれてゐるからに違ひない。いはゞこの賦は曹植の底知れぬ孤獨の淵に生ひ出でた虹の華であつた。

黃初三年といへば、上に述べたやうに、曹植が讒言によつて鄄城から京師に徙され、南宮に廢置せられて、再び釋放されて東藩に歸る途すがらである。（魏志には三年に朝することを云はず、すゞに四年雍丘に徙り、その年京師に朝することになつてゐて、この三年は或は四年の誤かとも見えるが、四年とすれば任城が急死して、白馬王と歸路を共にし得ぬ悲憤の情を、かの七首の詩に托した時である。三年か四年か、もとより考證の限りでないが、やはり序の文通りに黃初三年、一旦鄄城の封地に淋しく歸る途中のことと考へ度い。いづれにしても彼の憂愁がひとへに深まりゆく頃の作であつた。）

既に華やかであつた若い日は夢と消え、東藩に於ける退屈な生活、それも冷い周圍の目に取り卷かれつゝ、與へられた「圖牢の養物」の生活はいつまで續く。懷しい母は京師に在つても兄の思惑を氣兼ねして、何らの心を通じて貰へず、兄は天子の尊にあり、有司百官朝に並ぶ彼方に、冷い法權を握る人、諸王兄弟は互に切り離されて音信をも通じ得ず、腹心の者は已に朝廷によつて次々に誅せられ、いづこに我が胸を披き、わが赤心を投ずるところがあらう。冷酷と汚濁にみちたこの世の中、身は目に見えぬ繩に拘束されて、或は二年、或は三年と、心定まる暇もなく、轉々と物佗びしく生活の資乏しい地方に遷されてゆく。まことに清らかなもの、美はしきものはこの世になく、愛と自由はこの世に生くる身に許されぬものであらうか。逝く川の水は永遠を思はせて流れて止まぬ。蒼茫と暮れゆく川のほとりに佇んで、昔語りの洛水の神女の幻を描きつゝ、而も我は遂に現し世に拘はるゝ身と、去りゆく神女を空しく見送る彼であつた。その神女すら、いづれ神の世の嚴しい掟に、盛年空しく過ぎゆくまゝに良會の永く絶ゆるを、羅袂を掩ふて涕泣する運命にあるのであつた。

曹植には出世間的逃避思想は見られない。たゞあるのは當世への未練である。俗世を見すてゝ、心を仙境に遊ばせればこの世の憂は笑ふ可きであらう。それを求めたのは晉の世の賢人たちである。曹植にはそれはなかつた。

知遇に感激し、死力を盡して己が任に一身を捧げ得るなら、事成らず半ばに死すとも悔はない。洛神賦の作られた恰度その頃、蜀に於ては諸葛孔明がこの道を歩んだ。曹植はそれを願つて遂に許されなかつた。

翼を斷たれ、脚に環をはめられた荒鷲の、空を望んでは執拗にはばたき、夢に蒼空を驅け、さめて我身を顧みては悲號する如く、自信と未練との救はれぬ心から、華やかにして凄愴なその文學が生れた。

凡そ中國古來の文學は、この種の未練が非常に多くの場合作品の根本思想であることを私は考へる。出でゝ經綸を行ひ得ぬ憾み、それは己れの力を世間が認めぬ嘆きであり、無殘に傷けられた自信である。屈原の楚辭然り、杜甫の詩然り、悠々山林に遊んだといはれる柳宗元の文章も全く社會への未練と反撥ではないか。たとへ作者の抱く經綸といふものが、事實は極めて非實際的な、果して彼にその地位を與へても、恐らく彼自身の心に描いたやうな成功は覺付かないと思はる場合でも、我こそ玉を抱いて頑みる人なきのみか、我が抱ける玉を傷けられて、遂にその耀きを世に發することの出來ぬといふ怨みが、彼らをして一途にその情熱を文學に注がせたのであらう。

槊を横たへて詩を賦した、權力そのものゝ如き父曹操の文學は、蒼古沈雄と評され、計謀に富む細心の兄文帝の文學は美女の婉約にたとへられる間に、曹子建の文學はまことに悲痛にして哀婉、六朝の人々は曹植の文學を極力讃美して止まず、謝靈運は之を評して天下一石の才、曹子建がその八斗を占め、我れ一斗を得て、殘る一斗は天下之を分つと云ひ、鍾嶸は曹植の詩を評して、「骨氣奇高、詞采華茂、情は雅怨を兼ね、體は文質を被り、粲として今古に溢れ、卓爾群せざるもの、いはゞ人の中の周公孔子、鳥獸の中の龍鳳」とまで尊崇したことであつた。